

阪神・淡路大震災から17日で20年。この間に新潟県中越地震や東日本大震災なども発生し、防災の重要性は一層高まっている。いざという時に役立つ防災グッズを紹介するとともに、選び方のポイントをまとめた。

(小谷野太郎)

■必要なモノを整理

一言で防災グッズと言っても、状況によって必要なものは違ってくる点を、まずは頭に入れておきたい。

最優先は被災直後の安全確保になる。例えば、大きな地震に備え、家具や戸棚などが倒れるのを防ぐ器具を設置し、頭を守るヘルメット、延焼を防ぐ消火器などは備えておきたい。

次に、自宅から広域避難所などに一時的に移動する際、持ち出すものだ。

災害危機管理アドバイザーの和田隆昌さんは、「持ち出し用と備蓄品はしっかりと分けて」とアドバイスする。自宅が全半壊でもない限り、被災後も自宅で過ごすのが基本になる。帰宅が前提の場合、持ち出し袋の中身は「安全に避難場所まで行けて、1〜2日過ごせる必需品でいい(和田さん)」という。背負って走

備えが大事 防災グッズ

頼りになる防災グッズを選びたい

商品名	モーリアン ヒートパック (Lサイズ)	水電池 NOPOPO (ノポポ) 3本パック	缶deポローニャ (デニッシュパン)	セイシエル サイバルプラス 携帯用浄水ボトル	充電式ライト 「ソーラーパフ」
希望小売価格 (税抜き)	1100円	600円	400円	7000円	3300円
企業名	協同	ナカバヤシ	ポローニャFC本社	ヴォータックス	ランドポート
特徴	水と発熱剤で高温の蒸気が発生。15〜20分で60度ぐらゐまで食品が温まる。1回で缶詰なら3缶温められる	未使用なら約20年は劣化せずに保管できる。携帯ラジオや懐中電灯など低消費電力の機器向き	東日本大震災後には生産が追いつかないほど注文が殺到。「おいしい非常食」としてギフト用でも人気	内蔵フィルターで雨水や河川の水も飲料用に浄化。ボトル容量は600ml。災害時のほか、アウトドア用品としても人気	縦・横・高さ各11cm。折りたたんで収納可。本体の太陽光パネルは8時間でフル充電。最長12時間点灯

れる程度の重量(10kg・以下)に抑えるのが目安だ。この20年で、社会環境は大きく変わった。その一つが通信への依存度の高まりだ。人々の情報源として携帯電話や

スマートフォンは手放せなくなっている。避難時には端末本体だけでなく、充電器や予備のバッテリーがあるといい。充電器や非常用携帯ラジオなどで、ハンドルを回して

東急ハンズ新宿店では約600種類の防災用品を取り扱っている(東京都渋谷区で)



発電できる製品もある。

■水で発電する電池

一方、備蓄品では食品とエネルギー源を工夫したい。高層マンションなどが増え、電気やガスなどのライフライン(生活線)が止まると、特に高層階では日常生活の維持が難しくなる。

協同(埼玉・入間)が販売する「モーリアンヒートパック」は、耐熱性の加熱袋の底に発熱剤を置き、レトルト食品などを入れて水を注ぐと高温の蒸気が発生し、食品を60度ぐらゐまで温められる。

ナカバヤシ(大阪)の水電池「NOPOPO(ノポポ)」は、

進化する機能 * 目的別に分けて * 年2回見直しを

付属のスポイトで少量の水を本体に注入すれば、単3形電池として使える。携帯ラジオなら、水を3〜5回注入して計約48時間使えるという。ジュースなどでも発電できる。

■非常食も多様に

ポローニャFC本社(東京)の「缶deポローニャ」は缶入りのデニッシュパン。加圧と加熱で缶を無菌にしているのので3年間保存できる。06年に発売し、11年の東日本大震災直後は注文が殺到し、製造が追いつかなかったという。防災グッズ売り場を常設する東急ハンズ新宿店(同)では、水や湯を注いで食べるアルファ米や、缶入りパンのほか、卓上コンロ用のカセットボンベを使うヒーターなども人気という。売り場担当の須藤恵理子さんは、「普段から使えるアウトドア用品も、非常時に活用しやすい」と助言する。

被災後3日間は冷蔵庫に残ったものを食べ、食料と水を4日分用意しておけば、計1週間分を賄える。和田さんは「夏と冬では必要なものも異なるので、年2回程度は備蓄品を見直してほしい」と話す。